和川柳社／8月会報より抜粋

# 「朝日川柳」についてとんでもない暴論投稿あり

## ◆『正論』10月号

### 「せいろん川柳」選者

### 江畑哲男氏の論考を紹介

### 常識的な『世界』9月号の論考と比べていただきたい。

周　立東爺

尊柳さんのおたより（前出）で教えていただいたのが、「右派系の雑誌『正論』10月号に、全日本川柳協会副理事長・江畑哲男氏が朝日川柳について書いている」という話だった。

さっそく入手。肩書きもさることながら、かつて小生が川柳初心者のころ読んだ江畑哲男氏が「朝日川柳」はプロパガンダだ、これは川柳ではない、と断じている。論旨も乱暴で川柳についての説明も独断と偏見に満ち、まずはびっくり。以下、おおまかに内容を紹介。

**①導入部＝**川柳はマイナーな文芸で「俳句＝高尚、川柳＝低俗」との一般的な図式を紹介。思わぬ脚光を浴びた「朝日川柳」だった。朝日川柳への非難、抗議、疑問や問い合わせが届いた。

**②川柳の基本と特徴＝**川柳は口語で人間や人間社会をテーマにする。例句で「見舞いには日本銀行券がよし（今川乱魚）」などをあげる。

**③朝日川柳は三つの「あり得ない」**　これは川柳ではなく、プロパガンダだ。

**あり得ない1＝**元総理の死去すぐに批判句が殺到したのがあり得ない。

**あり得ない２**＝「選句」では一つのテーマに賛否両論双方をバランスよく採るものだ。一方に偏るのはあり得ない。

**あり得ない３**＝新聞などでは評価が分かれるテーマでは特に目配りと配慮が肝要である。

**④以前から朝日川柳の選者「西本空人」はおかしい。**しんぶん赤旗にも安倍氏受難関連の入選句はなく、よみうり時事川柳も同様なのに。

**⑤「正論」の川柳欄「せいろん川柳」**（江畑氏が選者）から、安倍事件をテーマにした秀逸句を紹介。

**「巨星墜つ勝利も虚し参院選**　菅原啓昭」

右派雑誌「正論」に書いた江畑哲男氏の表題

特集 安倍元首相なき光景

**「朝日川柳」はプロパガンダ**

全日本川柳協会副理事長 **江畑哲男**

**⑥過去の西本空人選の川柳をみると**「世論操作の道具として川柳が便利に使われている」のがわかる。

**⑦「川柳本来の魅力の発信を」**として、二面性をもつ人間を単純に対立させるような「狭小な主義主張を押しつける道具でない」。

**⑧西木空人氏は朝日新聞の元編集委員でコラムニスト。**川柳の専門家ではない。大手新聞の川柳欄でも川柳人以外の人が担当している。改善してほしい。

……

以上、おおざっぱに要約したが、「朝日川柳」を批判するというより、朝日新聞と西本空人氏を罵倒する文章だというのが筆者の感想である。

これを読んだ「和」の同人から感想＝

●江畑さん、物を考える態度がいい加減で独善的ですね。

●「正論」買いたくなかったが、買ってきて一読。「正論」全体の主張と同類ですね。この本を読むと胸が

悪くなりました。

後日、この江畑論文？への批判をまとめたいと思いますが、「あり得ない」と書いている話も一方的な解釈で、報道と文芸を混同している。「批判句だけが集まるのはあり得ない」と言うが、おおいにあり得ることです。国葬反対は世論の主流、国民は国葬に怒っている。また、「選者は賛否両論双方をバランスよく採るもの」と主張するが、これは選者の立場ではない。選者は自分の川柳観で句の良否を判断するもの。バランスをとることなどあり得ない。

岩波の**『世界』**の高橋純子氏の小論で紹介された川柳の本質＝**「川柳は『寸鉄人を刺す』であり、力のない庶民が権力者を切るための文芸であった」**という点が全く抜けていることである。小生が前月の「和」の会報で紹介した**「諷刺とはなにか＝お上は人民を教化するのに対して、人民は詩でお上を諷刺し諫める。これで社会のバランスがとれる」**という諷刺（「詩経」序文）への理解がまったくない。川柳を語っているようで本質を避けて語らず、川柳を体制派・右派論調を補強する添え物にしている。

この度の『正論』の散文に接し、全国の川柳結社を束ねる全日本川柳協会幹部の川柳観を知ったことは収穫であった。（和川柳社代表・周立東爺）

## 『世界』９月号より紹介

高橋 純子（朝日新聞編集委員）

### 『冥福の祈りを邪魔しているのはだれだ？』国葬と真夏の五月蠅（さばえ）について

「（前略）なにより看過できないのは、いっぺんの議論もないまま、国葬を九月二七日に行うと決められてしまったことである。（略）岸田文雄首相は、自身の政権基盤を安定させるため、党内保守派に配慮して国

葬を決断したというのが大方の見方だ。弔問外交への期待もあると報じられている。（略）約（つづ）めて言えば「現政権のための国葬」ということになる。「死者の政治利用」と言わざるを得ない。（略）過日、七月一五日付の朝日新聞朝刊に掲載された「朝日川柳」が、ネット上で「炎上」した。（略）次の七句を並べたことも「死者に対する侮辱だ」などと激しい批判にさらされた。

**疑惑あった人が国葬そんな国**
**利用され迷惑してる「民主主義」**
**死してなお税金使う野辺送り**
**忖度はどこまで続く　あの世まで**
**国葬って国がお仕舞いっていうことか**
**動機聞きゃテロじゃ無かったらしいです**
**ああ怖いこうして歴史は作られる**

もとより時事川柳は**『寸鉄人を刺す』であり、力のない庶民が権力者を切るための文芸であった**」（月波与生氏（つきなみ よじょう）が運営する川柳総合サイト「川柳の話　満天の星」より）――というそも

---

そも論はさておいたとしても、なにをそんなにいきり立つことがあるのだろう？　たとえば少し時間をおいて読み返した時、この七句のなかに、亡くなった個人を侮辱したり揶揄したりしている要素を見いだせるだろうか。

失礼だ。侮辱だ。冥福を祈れ。

ああ、五月蠅（うるさ）い。私は――おそらく川柳作者も――冥福を祈る時はひとり静かに祈りたいのだ。それを邪魔しているのは国葬の方である。

（中略）

まさかこんなことを言う日が来るとは思ってもみなかったが、言ってしまおう。少なくとも安倍氏は、戦後民主主義との闘いに実存をかけていた。岸田首相はどうだ？　遠望するまなざしを失い、ひたすらに「保身」のそろばんをはじき、結果、戦後民主主義にのそっと刃を向けている。悲しくなるほどの舎弟しぐさ。しかもそれが、少し前まで「リベラル」を自認していたはずの人だと思えば、悲しみはいや増す。（後略）」

## 連絡などはメッセンジャーでどうぞ